

天然痘と種痘



*小田家文書（山口市吉敷）245「善那（ジェンナー）氏種痘発明百年記念会報告書」

解説

天然痘（疱瘡）は、史上最も人類を苦しめた伝染病のひとつです。

一度かかったら再びかからないことは知られており、古くから中国などでは天然痘患者の膿（うみ）や痂（かさぶた）を健康な人に接種して軽度の天然痘を起こさせて免疫を得る「人痘法」が行なわれていましたが、安全性が充分でなかった等で普及しませんでした。

1796年にイギリスの医師ジェンナーが、ウシが感染する牛痘の膿を用いた安全な「牛痘法」を考案すると、これが世界中に広まりました。日本でも1849（嘉永2）年6月に佐賀藩がオランダ商館医モーニッケを通じて牛痘苗を輸入し、長崎で種痘に成功してから諸藩で普及し始めましたが、幕府の対応は遅れ、江戸ではようやく1858（安政5）年に伊東玄朴ら蘭方医の努力によって「お玉ヶ池種痘所」が開設されました。

当時の種痘は、写真のように、善感（種痘の効果が現れ、免疫を生じた状態）した子どもから種を取り（取苗）、植え次いでいく（伝苗・種苗）ものでした。

*天然痘に対する人々の恐れや祈りは、当館に所蔵されている数多くの資料によってうかがえます。第11回アーカイブズウィーク解説シートをご参照ください。

http://archives.pref.yamaguchi.lg.jp/user_data/upload/File/iyasu10.pdf
（「10 疫病と疫神」）